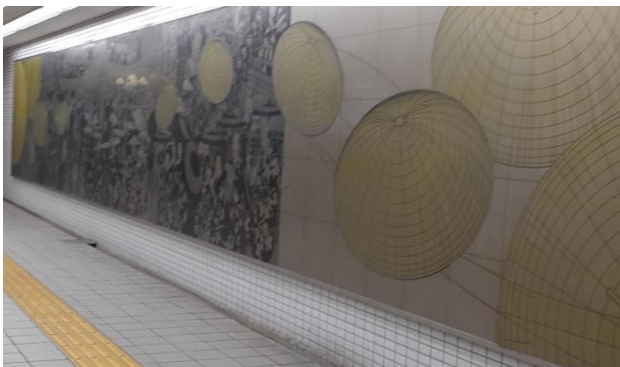


深江の菅笠

本間 一恵

昔、深江は良質の菅草が豊かに自生する浪速の一島で、第 11 代垂仁天皇の御代に、大和の国の笠縫邑（かさぬいむら）より、笠縫一族が移住し、代々菅笠を作ったことから、笠縫島といわれていました。今も、歴代天皇即位、大嘗祭（だいじょうさい）の時をはじめ、20 年に一度の伊勢神宮式年遷宮に使用する儀式用の菅笠はこの地から奉納されています。江戸時代、伊勢参宮の人々は道中の安全を願って当地で菅笠を買い求め賑やかに旅をしました。

11 月末大阪に滞在していた時、翌日の予定を決めかねていたところに、民博の上羽さんとカゴアミドリの伊藤さんが菅笠の見学に行くという話を聞きつけた。渡りに船と、早速便乗することに。



大阪メトロの新深江駅に着くと、冒頭の文章のパネルと菅笠の壁画が出迎えてくれた。ここは歴史的にも菅笠と深い結びつきのある場所だったようだ。実は私の中で、菅笠と大阪とはあまり結びついていなかった。ずっと以前に、十文字という村?の新聞記事に菅笠が取り上げられていて、その時から、どこかも知らぬままなんとなくこの種の笠の産地は十文字というイメージだけが残ってしまった。今調べてみると、秋田県横手市十文字らしい。仁井田菅笠という名前も出てきた。スクラップしたはずの何十年も前の新聞記事を探すよりも、インターネット様さまだ。

縫い笠と呼ばれるスゲの葉を縫い合わせた笠は、以前は各地で作られていたようだが、全国的に見ても今でも活気を見せているのは、国の伝統的工芸品の指定を受けている越中福岡の菅笠、富山県である。ここでは新しい試みもされていて、デザインの的にも展開がはかられている。また、山形の花笠音頭で使われる赤い花の付いている笠も菅笠で、これは飯豊町中津川などで作られているようだ。ベトナムにもよく似たものがある。ただ、深江の菅細工は、民具としてだけでなく、大嘗祭や式年遷宮とかかわる特別な役割を備えているという特徴がある。

深江郷土資料館に着くと、菅細工保存会の笠野さんと只石さんが出迎えてくれた。そして玄関前にはスゲの田んぼ。一見田植えを終えた水田のようだが、スゲの束が折られ 45 度の角度で突き刺さっている。湿地帯に自生しているようなイメージでいた私には驚きだった。展示されていた古地図には、菅田というエリアがあちこちに書かれていて、当時を思わせる。栽培に適した土地だったのだろう。



資料館の前半は、この地に4代にわたって続く角谷家の鋳物技術による魅力的な茶釜の数々が並んでいる。そして、伊勢神宮式年遷宮祭に奉納された菅御翳（すげのおんさしは）と菅御笠（すげのおんかさ）の展示から後半の菅細工のエリアが始まる。



スゲでは、笠のほかに、円座や釜敷、小丸という鍋敷きなども作られている。

近くにある保存会のメンバーが作業をする場所にも案内していただいた。笠は竹の骨組みが下地であって、縁となる竹の輪にスゲの葉を一本一本付けていき、並んだ葉を隣同士針と糸で縫いながら頂部へとすぼませていく。竹の部材は別のところで作ってもらうようだ。針は市販のものでいいらしいが、とにかく一針一針丹念に縫っていくという手間のかかる仕事である。頭頂部には六本の葉が結び合わされて飾りになっているのだが、これは後から付けたのではなく、縫い付けていくスゲの中から長く残しておいたものを使う。一見装飾に見えるものが、構造体と一体であるというのは、かごの場合の魅力の一つだと思うが、そのために、縫っている間中、その長い葉を傷つけないように気配りし続けなくてはならないという負荷が作り手にかかるわけである。

右上の写真では笠の頭頂部が切れてしまっているが、隣にあるキーホルダーの中心と同じ結びになっている。円座の表側は平滑だが、裏側では左下に写っているように捻って止めている様子を見ることができる。

素材は富山から買っている部分もあるらしい。笠にふさわしい幅の広い上質な材を育てるのは難しいそ



うだ。以前は捨てていたような部分も今ではリースなどに無駄なく利用している。後継者の問題も喫緊の課題とのこと。いろいろ聞かせていただいたが、でも「楽しい!」というキラキラ発言が一番心に残った。

べ飾りらしいものも見かけたので、この地方のものかと思ったが、どうやらどこかで見たもののデザインを取り入れたらしい。著作権があるようなものではないから、たしかに借りてくるのも真似るのも簡単だ。特有のスタイルがある地方ではできるだけそれを踏襲していったほしいが、特にないところなら、新しく入ってきたものが、共有されていくのもありだろう。それはそれで新しい伝統になるのかもしれない。

れない。外で見かけたものの中にはかたちも洗練されて美しいものがあった。

駅への途中にある深江稲荷神社。スゲで作った細縄があちこちで使われている。狛犬の首に巻かれたものは、色も失われかなり風化が進んで



いた。一方、庇のある小さな社のところのものには、まだ質感が残っていた。雨や日射しへのさらされ方の違いのせいだろう。自然素材、特に草などは風化が速い。だから注連縄も新しくする。それがまた意味を持つ。もともと植物は放っておけば枯れて自然に土に戻るわけで、そうなるまでの間を、ヒトが素材として利用しているのである。そしてそのヒトもまた同じく寿命のある自然の一員だということ。